

(二〇一一年) 新春に当たっての所感などを語って頂きました

「御礼」

待望の映像再生装置を購入

音楽などの鑑賞にはその会場まで出掛けて行きその場の雰囲気や臨場感に浸りながらの鑑賞に超したことは無いのですが、チケットの入手や会場まで出掛ける手間や時間の関係からそういう機会を持つのは限りがあるのではないのでしょうか。

我孫子オーディオファンクラブとしては、その名の通り音楽を再生装置により良い音で聴くのが本来の姿であったと思います。近年デジタル化が進みテレビにおいても大画面による迫力のある映像を高画質で見られるだけでなく、高音質で聴く事が当たり前となりつつあり、当クラブでも大画面による映像再生装置の設置は必須の状況となっていました。

しかしながら現在の会場では、大型のテレビの常時設置は不可能であることが判明、いかにしてそれを実現するかが当面の課題となっており、いろいろと検討を重ねた結果「プロジェクトの採用がベスト」ではないかとの結論に達しました。現状ではテレビに比べかなり高額となるため当会の予算では無理なことから急遽会員の皆様からの寄付金によりそれを実現したいとのことと皆様にご協力をお願いしましたところ大いなるご賛同を頂き、お陰様でメインのプロジェクトと同時にプレイヤーにケーブルなども購入するに必要な資金が確保出来ただけでなくスクリーンも思いがけなく会員の方に寄贈頂くなど念願が叶うこととなりました。

今後この映像装置を活用しての例会発表が大いに期待されることです。

皆様方のご協力本当に有り難うございました。

会長

《音楽と共に》



石田 隆

私がAAFCに参加してからもう十年近くになりますが、五年ほど前に耳を悪くしてからは例会をサボりがちで失礼しています。新しい方も増えて置いてかれそうですが、あいかわらずマイペースでオーディオに取り組んでいます。

オーディオは音楽と私たちを繋ぐ接点の一つという面と、技術的なメカニカルな要素という二面を求めています。これがこの趣味に多彩な趣味と追求し尽せない深さを持たせている様に思います。

機械としてのオーディオは無機質な付き合いにくい要素にも見えますがその実、単純な合理性からは少し離れた不可思議な面も持っています。人間的な感性が色濃く反映する面白みがありますね。

音楽も解析的にみればその奥行きは深さもとてつもないものがありますが、再生装置も変わりようがないと思えるデジタルでさえ、そのプロセスによっては面白い様に音楽の表情を変えてしまう様に、使いようによつては音楽のまた違った面を見せたり、その表情も変わってくる面白みがオーディオの楽しみではないのでしょうか。

音楽と言ふ不思議なものに魅入られた皆さんが、それを身近に再現できるオーディオを機に集まるというのも思えば不思議なものです。私もこれからもこの不思議なオーディオと戯れながら、文字通り楽しく音楽と付き合っていきたいと思えます。

ブログ (http://milestone.at.webry.info/)

《AAFCのビジュアル元年おめでとう》



澁谷 賢三郎

幹部のご努力により聴覚主体の音楽鑑賞に視覚が加わり、より完全に近い装置になりました。有難うございます。

一杯のコーヒーでネバリにネバリ、目を閉じて必死に聞いていたのを思い出します。今考えると音楽に飢えてガツガツしていたんですね。

これからは時の流れで映像が主流になるのでしょうか。L.Dの名指揮者や名歌手によるオペラは宝物です。SP、LP、CDの名盤と共に何時までも我々の座右にあるに違いありません。

話が変わりますが、一年前に耐震工事をした時に誤ってダウンライト6個の配線を切ってしまったので電球を外し、穴を塞ぎました。すると音が一变し、高音の艶や輝き、舞台との間の空気感や音の分離が良くなりました。アレツ？

ボリュームを上げてても低音が豊かに伸びていません。計算機片手に設計し床、壁を二重にしたのに音が漏れていたのです。部屋を直して二十数年間損したなと思いましたが、今は生演奏に近くなった感じで満足しています。クラブに入る前に直つていてよかったです。

今まで聴く気にならずお蔵になっていたショスタコービッチの弦楽四重奏曲をきいてベーパーベン曲に近い感動を受けました。一部の交響曲のように無理なところが無いので素直にきけました。蘇がえるCDが大分ありそうですね。当分は楽しめるでしょう。

今年はおペラと室内楽を主に聴きたいと考えています。なお小編成の曲はマランソンSamsi・ラックスSOS・タンノイスタングラー、大きな曲と映像付きはマッキントッシュMesos インフィニティルネッサンスで聞く場合が多いようです。

《音楽との長い付き合い》



宇多 弘

幼児の頃、ラジオから流れるメロディーを復唱していたと親が云っていたのが最初らしいです。

小中学校では教材の定番SPレコード等を聴く程度でした。それが高校時代には「音楽評論」誌を読んで考えが変わりクラシック以外に「民族音楽および大衆音楽」にも…と積極的に戦線拡大していきまし。

当時はアルゼンチン・タンゴがブーム、聴き捲つて「民族・大衆」を一挙にカバーし、そして中南米全般へ。その後西海岸系のクラシック味が残るモダンジャズから東海岸へ、暫く中断してCD出現前後からはオリジナル曲の宝庫でアレレンジ前面のフュージョン系に新天地を求めました。

例に漏れずナマ音に接近すべく、学生時代からオーディオ機材の自家設計と製作を手掛け、回路実験やらアンプ試作に入れ込み、試聴の際にはツイ鑑賞にシフトです。

また一時は素質も無いのに楽器をいじり素人バンドに加わり、音楽への接近、構造理解には抜群の効果がありました。特定の曲、またはグループ、プレイヤー、アルバムを何回でもくり返し聴き込んで耳に馴染ませる過程を「開拓」と呼んでいます。そして五秒程度の断片を聴けば曲名やらプレイヤーがほぼ特定できて、「音楽」音が「苦」が「オンラク」となるのですが、なにぶん記憶容量には限界がありまして…。

AAFCに入会して十二年余、皆様から色々な音楽を聴かせていただき、新しい楽しみを見ました。そして今後とも皆様からの一層のご指導を頂きたいと存じます。